



unicef

ユニセフと日本

日本ユニセフ協会は
今年創立40周年を
迎えます



ユニセフのミルク給食（岡山県児島郡瀬崎小学校）

戦後の日本の子どもたちは、ユニセフ給食の脱脂粉乳で飢えをしのいだとはよく聞かれるところだと思います。実際、昭和24年から39年までの15年間、日本はユニセフから脱脂粉乳や衣類を作るための原綿、医薬品など当時の金額で65億円もの援助を受けました。

「だから、日本も豊かになった今、恩返しをしなくては」という気持ちからユニセフ募金をしてくださる学校も多いと思います。それでは今から40年前、日本ユニセフ協会の設立のいきさつはどんなものだったのか、ちょっとしたエピソードをご紹介します。

「お礼などいわれるほどのことはありません。国連がこのユニセフを作った訳は、本当に戦争で迷惑したのはお母さんと世界の子どものからです、なすべきことをしているのだから、お礼をいわれる筋合いのことではありません。子どもたちは着物やシャツをもらったことなどはすぐに忘れて元気になって欲しい。」

このことばに感動した人々が日本もぜひ協力しなければならないと決心して作ったのがユニセフ協会というボランティア組織、今の日本ユニセフ協会の始まりだったのです。

編集部注：このとき最終的に子どもたちに届いたのは衣類でしたが、ユニセフが送ったのは、日本の紡績工場の優秀な技術が活かせるように配慮した「原綿」でした。それを日本で必要な様式、数量に加工して必要とする人々に届けたのです。このような当事者の自立を中心に考える方法は現在のユニセフの途上国支援においても相通じるやり方です。

1

ユニセフと 日本ユニセフ協会

*ユニセフニュース第16号 昭和36年6月発行より

(当時の日本ユニセフ協会の松岡暁美専務理事の話を要約)

昭和24年の7月のことでした。物資がぜんぜん届かず困っている日本の子どもたちをみて、進駐軍のある人がユニセフに、日本の子どもたちを助けるようにというメッセージを送ってくださったそうです。そうしたらストレーラーというスイスの女性が日本へユニセフ代表としてやってきて、全国40万要保護世帯の子どもたちに必要な衣類を届けてくださいました。

……そのころはもうみんながメリケン粉の袋を着物代わりにしたような妙な格好で、裸足で歩いたり、今からは考えられないような状況でございました。

感謝してお礼を述べる日本の代表にストレーラーさんはこうおっしゃいました。



ひとりひとりに配られた10円募金の袋



ユニセフから贈られた学校の制服を着て写真におさまる福島県の子どもたち

2

学校募金が 日本ユニセフ募金の はじまり

財団法人となった昭和31年から、全国の小・中学校の子どもたちを対象に通称10円募金という形で募金が行われるようになって今にいたっています（左図参照）。